

市民が集まり、憩い、楽しめる緑豊かな場所にいたしましょう



森の中の高知駅



高知を愛する皆様へ（令和元年11月号）

令和元年11月1日

知り合いから「台風、高知は大丈夫でしたか？」とよく訊かれました。甚大な被害を蒙った各地の方々には、慰めの言葉が見当たりません。

さて、今月のボランティア活動の予定です。ご有志のお越しをお待ちしています。

11月17日（日）

08:30～10:00 南口電停脇の「みんなの庭」に冬～春花 200株ほどを入れます。

14:30～15:30 中央公園前の帯屋町筋で、葛岡さんによるギターライブとチラシ配りを行います。

なお、前々日の15日（金）、前川種苗さんの手をお借りして土叩き、施肥など準備作業をします。

<12の共同活動日は8日（日）、来年1月は19日（日）の予定です>

10月のトピックス

○13日（日）、南口「みんなの庭」の草引きなど、5人がかりでたんねんに手入れをいたしました（写真右）。秋陽を浴びてコスモス、紫式部など季節の花が咲いていました。猛暑に耐えてくれた夏花とは間もなくお別れです

週明けには追加で北口駐輪場の植栽もきれいに整理しました。



..... 2、3ページもご覧ください.....

駅前緑化活動はご賛同の方々のご厚志で維持されております。引き続き皆様のお力添え（花苗持ち寄り、勤労奉仕、ご寄付など）をお願い申し上げます。

♥森の中の高知駅♥ 幹事連絡先：〒780-0042 高知市洞ヶ島町1-11

中田昌志 携帯電話：090-8849-3651 E-mail：m.nakata@ak.wakwak.com

公文敏雄 携帯電話：090-7016-3743 E-mail：kumont2@yahoo.co.jp

ホームページ：<http://mori-kochi-ekijimdo.com/>

取引銀行：四国銀行よさこい咲都支店「森の中の高知駅 代表中田昌志」ナカタマサシ 名義 普通 0709695

「緑のまちづくり」を考える（35） 庭に1本の厄介な大木、切ろうとしたら…

—本文は、独自の作風で知られる作家内海隆一郎（1937-2015）の短編集『人びとの忘れもの』に収められた作品『^{けやき}櫨の木』のあらまし(抄録)です—



都心のマンション暮らしが長かった原田さん夫妻は、夢見続けてきた「庭らしい庭」付きの古家を買って郊外に移り住むこととなった。ところが、引越しの前日に点検に来てみたら、梅、桃、百日紅、木犀…など風情ある庭木がごっそり消えてしまっている。仲介の不動産業者に怒鳴りこんだが、庭木は契約に含まれておらず、売主が持っていったと一蹴された。がらんどろになった庭の北隅には、幹の太さが一抱えはあろうという大きな櫨の木が一本、初秋の陽光を浴びて、葉の繁った高い梢を風にそよがせていた。

仕方なく、同じような庭木を入れることにして植木屋に頼んだ。<植辰(うえたつ)>という初老の植木職人は、櫨を眺めながら「それにしても、厄介な木が一本残っていますね」と言った。

冬が近づくと、櫨の葉は一斉に黄色くなり、やがて幾筋もの伸びきった枝から、絶え間なく黄葉を振り撒きはじめた。そうしたある日、眉根を寄せた隣家の主婦が3人連れでやってきた。「うちは、玄関も庭も落ち葉だらけですよ。」「雨樋が詰まりますよ。・・・越していらっしゃったばかりでご存知ないでしょうけど」。なんとか善処するからといって、とりあえずお引き取り願ったが、「叱責」された原田さんの不快感は頂点に達しつつあった。奥さんがその夜二人の息子に電話で相談したら「早く切っておしまいなさい。櫨一本で近所付き合いが悪化してはつまらない」と申し合わせたように言う。原田さんは渋い顔をしながら考え直して切ってもらうことにした。

<植辰>は気乗りのしない口ぶりで「切り倒すんですかあ。あれほどの大木を始末するのは容易なことじゃありませんよ。…が、何とか来年の葉の繁る前には手配しましょう」。

年が明けて、4月なかばごろ、櫨の木が新芽をふいた。その朝、原田さんがなにげなく縁側から見上げると、ほうき状の枝全体に。ほのかな薄緑色の霞がたなびいている。「来てみなさい…」「まあ、きれいなこと…」。新芽は、一日一日と変化を見せた。軟らかい筆毛で一掃きしたような淡い緑色が次第に濃くなってゆき、葉の密度も増してきた。風が渡るたびに、明るい陽光を弾き返して、無数の光の粒をつけたようにきらめいた。若葉は、ぐんぐんと大きくなっていくようだった。10日ほどしてから、奥さんが報告した。「ご近所の眼が陰しくなってきましたよ…」。

翌日の午後、門口で80歳近くに見える老人が櫨を見上げていた。「ごめんなさい。よそさまのお庭を覗きこんで失礼とは存じましたが…」。上品な老紳士はこの家の以前の持ち主だった。長い間この家で独り暮らしをしていたが、去年若い脳血栓で倒れて入院したのを機に、気遣った娘夫婦が自分たちとの同居を父親に承諾させた。そして、新居を建てる助けに、また、父親が心変わりしないうちに、手早くこの家を売却したという。庭木は娘夫婦の配慮で新居に移植された。老人は退院して新居に入り、庭を見て何か物足りない感じがして、最近それが何か気付いた。「櫨の木が欠けている」。じっとしていられなくなり、娘の制止もきかず出かけてきたそう。「あの木が新芽を吹くときが、毎年の楽しみでした。ごらんになったでしょう。あの美しさを…」。話しこむうちに、原田さんはこの老人が好きになった。玄関での別れ際に、原田さんはためらいながら、櫨を切り倒すことになっていると打ち明けた。「そうですか。やはり切りますか…」。

櫟を切り倒す日がきた。遅い朝食を済ませたとき、玄関のチャイムが鳴った。老人が悄然と立っていた。「どうも落ち着かないので、ご迷惑とは思いますが…」。縁側に座り、二人は黙りこくって櫟の木を見上げていた。やがて、老人が静かに話し出した。「樹齢は分かりませんが、30年前も確かにあのままの姿でした…。夏になると、葉が厚く繁って大きな影をつくります。その涼しい影が日時計のように回って・・・」。老人は遠い思い出を追うように話しつつ、いきなり声を強めた。「櫟のほうが先に住んでいたんですよ。そこへ私が住むようになって、ずっと後にまわりの家が建ちはじめたのです。…葉を落とすからって厄介者にするのは、後から来た人間の身勝手というものではありませんか。雨樋の掃除などは、ちゃんとした家なら、もともと毎年やるべきものです。玄関や庭にいたっては、毎日欠かさず掃除すべきものなのです。…わたしはずっとそう主張しつつしてきました。ご近所には頑固爺と呼ばれていたようですね。「いや、おっしゃる通りです。落葉を嫌うのは、われわれが自然と一緒に生きているということを忘れた、とんだ思い上がりです」。原田さんは胸のすく思いを味わい、自分も頑固爺の仲間入りがしたくなった。ようし、近所迷惑と責め立てるなら、雨樋の掃除くらい、わたしが引き受けようじゃないか。

作業にやって来た植木屋に伐採の中止を詫びると、むつかしい顔をするだろうと思いきや、<植辰>は陽やけした顔をほころばせた。「それは、よござんした。実は、わたしも立ち木を切り倒すのが大嫌いでしたね」。彼が言うには、一向に実をつけない木や花の色づきの悪い木の前で、「こいつはだめだから切ってしまうおう」と話していると、その年は心を入れかえたように大きな実や美しい花をつけるそうである。「やつらには心があるんですよ。ちゃんと聞いていて、頑張ろうとするんです」。・・・「すると、あんなに新芽が美しかったのは・・・」。

(おわり)